

# 永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2013年 1月

「パート1ー贖罪の犠牲」「神のみ言葉とみ働き」「印する働きと144,000人」

# 永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

## 目次

### 今月の聖書勉強

「パートI-贖罪の犠牲 (I)」

4

### 朝のマナ

「神のみ言葉とみ働き」

8

信仰によってわたしは生きる

### 現代の真理

「印する働きと 144,000 人」

40

最後の出来事

### 力を得るための食事

「輪切り大根の豆腐詰め」

50

### お話コーナー

「馬力 対 天の力」

52

#### 教会

##### 【正丸教会】

〒 368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1  
電話 : 0494-22-0465  
FAX : 0494-26-5059

##### 【高知集会所】

〒 780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2  
電話 : 088-831-9535

##### 【沖繩集会所】

〒 905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21  
電話 : 0980-55-8136

#### アクセス

ホームページ : <http://www.4angels.jp>  
メール : [support@4angels.jp](mailto:support@4angels.jp)

発行日 2012 年 12 月 31 日  
編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション  
〒 368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Images on front cover;  
HighRes on pages 8, 52

## みこころが天に行われるとおり

「あなたが……わたしを愛されたように、彼らをお愛しになった。」(ヨハネ 17:23)

「わたしをつかわされたかたのみこころは、わたしに与えて下さった者を、わたしがひとりも失わずに、終りの日によみがえらせることである。わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう。」(ヨハネ 6:39, 40)

「キリストという賜物が天父のみこころをあらわしている。……それは神が罪を憎まれることは死のように強く、罪人に対する神の愛は死よりも強いことを宣言している。神は、われわれのあがないを引き受けられたからには、その働きの完成に必要なものは、それがどんなに大事なものであろうと、何一つ惜しまれないのである。われわれの救いに必要な真理は何一つ与えられないものはなく、どんな恵みの奇跡もおろそかにされず、どんな天来の方法も用いられないものはない。恵みに恵みが、賜物に賜物が加えられる。神が救おうとしておられる人々のために天の倉庫は全部開かれている。神は宇宙の富を集め、無限な力のみなもとを開いて、それらを全部キリストの手にお与えになり、これは全部人類のためだと言われる。」(各時代の希望上巻 46)

「どのような言葉をもってしても、……贖罪の完全さをご覧になったときに、ご自分のひとり子に満足し、喜ばれた神の表現を伝えることはできない。……そしてこのお方が偉大な贖罪を受け入れることにおいて、ご自分の御子に示されたすべての恩寵は、このお方の民へ示される。……神は彼らをご自分の御子を愛されるように愛される。」(サイン・オブ・タイムズ 1899年8月16日)

「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。」(マタイ 6:10)

贖罪

パート I - 贖罪の犠牲

I. 贖罪の十字架の中心性

罪のための贖罪としてのキリストの犠牲は、他のすべての真理が周囲に連なっている偉大な真理である。(福音宣伝者 315)

それ〔十字架〕はその十字架を受け入れる人々のためのはるかにまさった永遠の重い栄光がかかっている中心的な柱である。不朽の柱であるキリストの十字架の下や周りでは、罪は決して復活することも、誤謬が支配権を得ることもない。(手紙 124, 1900 年)

罪のための贖罪としてのキリストの犠牲は、他のすべての真理が周囲に連なっている偉大な真理である。正しく理解し、感謝するためには、神のみ言葉にあるすべての真理を、創世記から黙示録まで、カルバリーの十字架から流れる光の内に研究しなければならない。わたしはあなたの前に憐れみと再生、救いと贖いの大いなる壮大な記念碑—十字架に上げられた神の御子—を提示する。これがわたしたちの牧師たちによってなされるすべての説教の基礎でなければならない。(福音宣伝者 315)

カルバリーの十字架はすべての世俗的かつ黄泉の力に挑戦し、ついには征服する。十字架においてすべての感化力が集中し、そこからすべての感化力が出て行く。それは魅力の大中心である。なぜなら、そこでキリストが人類のためにご自分の命を差し出されたからである。この犠牲は人を元々の完全さへ回復するという目的のために捧げられた。しかり、それ以上である。それは人に品性の完全な変化をもたらし、彼を勝ち得てあまりある者とするために捧げられたのである。……

十字架は支持する感化力を見出さないとき、感化力を創造する。各世代を通じて、この時代のための真理は現代の真理として表されている。十字架上のキリストは憐れみとまことが互いに会い、義と平和が互いにくちづけする媒体である。これは世界を動かす手段である。(原稿 56, 1899 年)

聖書を探る思いの前につねに保たれているべき一つの偉大な中心的真理がある—キリストしかも十字架につけられたキリストである。ほかのすべての真理はこ

の主題との関係においてそれ相応の感化と力を授けられている。わたしたちが神の律法の高められた性質を識別できるのは、ただ十字架の光においてである。罪によって麻痺した魂は、わたしたちの救いの創始者であられるお方によって十字架上で果たされた働きを通してのみ、命を授けられることができる。(原稿 31, 1890 年)

十字架にかかっておられるキリストが福音であられた。……これがわたしたちのメッセージであり、わたしたちの論拠であり、わたしたちの教理であり、悔い改めない者へのわたしたちの警告であり、悲しむ者へのわたしたちの励ましであり、すべての信じる人のための希望である。もしわたしたちが人の思いのうちに関心と呼び覚ますことができ、それによってキリストに目をしっかりととどめるようになるならば、わたしたちはわきへのき、彼らにただ自分たちの目を神の小羊に留め続けるようにと頼むことができる。(原稿 49, 1898 年)

キリストによってなされた世の罪のための贖罪に関して、もっとも強力に明言されている記述を集めなさい。この贖罪の必要を示しなさい。(伝道 187)

キリストの十字架において、共につけられた人々が一人はこのお方の右に、もう一人は左におかれたという事実は意義深い。このお方の十字架はまさに世の真ん中におかれている。(原稿 52, 1897 年)

キリスト、しかも十字架につけられたキリストこそ、神がご自分の僕たちに世界を縦横無尽に鳴り響かせることを望んでおられるメッセージである。律法と福音がそのとき、完全な全体として提示される。(レビュー・アソッド・ハラルド 1896 年 9 月 29 日)

聴衆に「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ 1:29) を指し示すことなしに、一つの説教も、あるいはいかなる分野の聖書の教えもなされてはならない。すべての真の教理は、キリストを中心とし、すべての規則はこのお方のみ言葉から力を受ける。(教会への証 6 巻 54)

クリスチャンから十字架を取り除くことは、空から太陽をおおい隠すようなものである。十字架はわれわれを神に和解させ、われわれを神に近づかせる。……十字架がなければ、人は神と和合することができなかった。われわれのすべての望みは十字架にかかっている。(患難から栄光へ上巻 225, 226)

キリストの受肉、このお方の贖罪の犠牲、そして仲保の働きは、勤勉な生徒の思いを時間の続く限り要する。(福音宣伝者 251)

わたしたちの罪のために十字架につけられたキリスト、死人の中かよみがえら

れたキリスト、高いところへ上られたキリストはわたしたちが学び、教えるべき救いの科学である。(教会への証 8 巻 287)

キリストしかも十字架につけられたキリストを福音の基礎として提示することなしに、一つの説教さえなされてはならない。(同上 4 巻 394)

わたしたちはキリストの血の力の主唱者とならなければならない。その血によってわたしたち自身の罪が許されたのである。(同上 6 巻 82)

科学はあまりにも限られていて贖罪を理解することができない。神秘的で驚くべき贖いの計画はあまりに遠大で、哲学はそれを説明することができない。それはつねに最も深い理性が測りしれない奥義であり続けるのである。もしそれが有限な知恵で説明できるなら、その神聖さと尊厳を失ってしまう。永遠の御父と等しいお方が人を贖うために十字架の残酷な死を受けるほど、ご自分を低くされたことは神秘である。そして神がご自分の御子がこの大いなる犠牲を払うことを許されるほど世を愛して下さったことは神秘である。(サインズ・オブ・タイムズ 1906 年 10 月 24 日)

魂がキリストを自分の唯一の希望として信じないようにさせることこそ、サタンの研究し尽くしている目的である。なぜなら、すべての罪から清めるキリストの血は、その功績を信じる人々のためだけだからである。(福音宣伝者 162)

## II. 十字架上でなされた完全な犠牲的贖罪

このお方〔キリスト〕は天地の間で十字架をお立てになった。そして御父はご自分の御子の犠牲をご覧になったとき、その完全さを認めて、その前で頭を垂れられた。「十分である」とこのお方は仰せになった。「贖罪は完全である」。(ビュー・アンド・ワールド 1901 年 9 月 24 日)

世の罪のためにほふられた小羊なるキリストの死において、型と本体が出会った。わたしたちの偉大な大祭司は、わたしたちの救いのために唯一価値のある犠牲を払われた。このお方が十字架上でご自身を捧げられたとき、民の罪のために完全な贖罪がなされた。わたしたちは今外庭に立って、祝福された望み、わたしたちの主であり救い主であるイエス・キリストの栄光の出現を待ち望んでいる。(サインズ・オブ・タイムズ 1899 年 6 月 28 日)

わたしたちの偉大な大祭司は門の外で苦難を受けられたときに、ご自身という犠牲の捧げ物を完成された。そのとき、民の罪のための完全な贖罪がなされた。イエスはわたしたちの弁護人であり、わたしたちの大祭司であり、わたしたちの仲

保者であられる。わたしたちの現在の立場はすなわち、イスラエル人の立場に似て、外庭に立ち、祝福された望み、わたしたちの主であり救い主であるイエス・キリストの栄光の出現を待ち望んでいるのである。(原稿 128, 1897 年)

全天が自分たちの王を迎える時が来た。御使たちはケルビムもセラピムも今や十字架を見ながら立っている。……御父は御子をお受入れになる。どのような言葉をもってしても、天の喜びや、贖罪の完全さをご覧になったときに、ご自身のひとり子に満足し、喜ばれた神の表現を伝えることはできない。(サイン・オブ・タイムズ 1899 年 8 月 16 日)

御父はキリストの友をご自分の友として受け入れ、お迎えになることによって、わたしたちの贖い代をご自分の血をもって支払われたキリストへの無限の愛を表される。このお方はなされた贖罪に満足なさる。このお方はご自分の御子の受肉、命、死、そして仲保によって栄光をお受けになる。(教会への証 6 巻 364)

御父は御子をご自分の右に座らせることによって、すべての支配や権威にはるかにまさって、このお方にすべての誉れをお与えになった。このお方は十字架につけられたお方を受け入れ、このお方に栄光と誉れを冠することに大いなる喜びと歓喜を表現された。そしてこのお方が偉大な贖罪を受け入れることにおいて、ご自分の御子に示されたすべての恩寵は、このお方の民へ示される。……神は彼らをご自分の御子を愛されるように愛される。……天の印が、キリストの贖罪に押された。このお方の犠牲はすべての面において満足させるものであった。(サイン・オブ・タイムズ 1899 年 8 月 16 日)

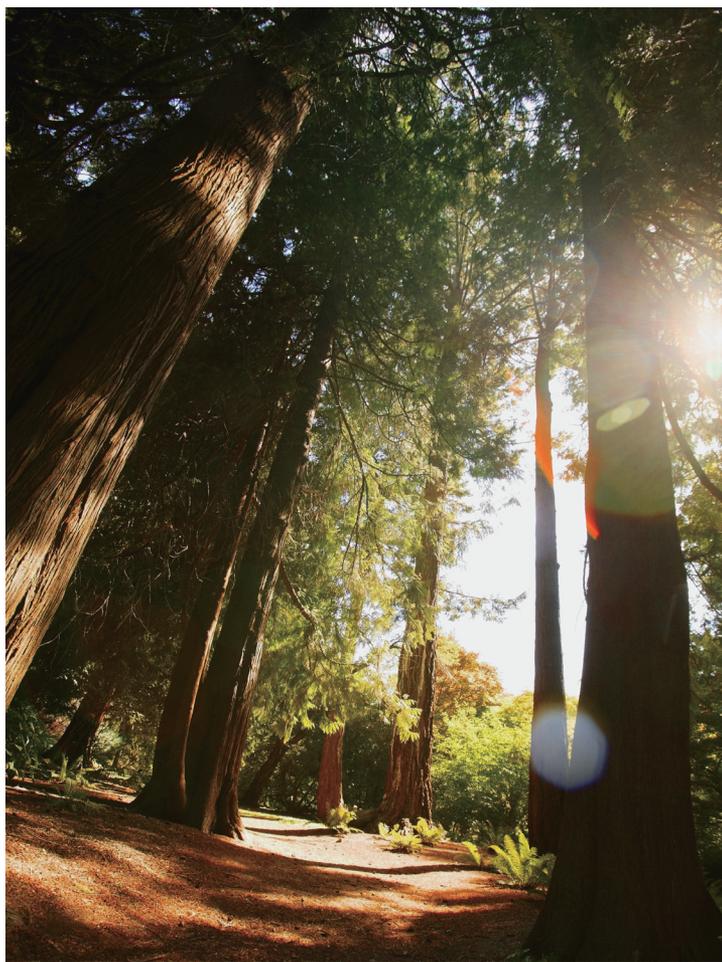
キリストの犠牲は十分である。このお方は完全にして力ある捧げ物を神に捧げられた。キリストの功績のない人間の努力には価値がない。(ビュー・アンド・ワールド 1890 年 8 月 19 日 (1896 年 3 月 24 日))

わたしたちのために払われた犠牲が完全であったように、罪の汚れから回復することも完全なものとなるべきである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 433)

カルバリーの十字架上のこのお方の死はこのお方の屈辱の頂点であった。贖い主としてのこのお方の働きは有限な理解を越えている。自己に死に、その命がキリストと共に神のうちに隠されている人々のだけが、墮落した人類を救うために捧げられた供え物の完全さをいくぶんか知ることができる。」(手紙 196, 1901 年)

# 信仰によってわたしは生きる

*The Faith I Live By*



1月 「神のみ言葉とみ働き」

## わが道の光

「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です。」(詩編 119:105)

浅瀬や岩の多い川を通る船員が水先案内人を必要とするように、わたしたちもみな人生における難局を道案内する導き手が必要であるが、どこでこの導き手を見つけられるであろうか。わたしたちはあなたに……聖書を指し示す。(教会への証 5 巻 264)

神はわたしたちの足のともしび、わたしたちの道の光としてご自分のみ言葉をわたしたちに与えて下さった。その教えは、人生のあらゆる関係におけるわたしたちの繁栄に、重大な関わりを持つ。……

聖書は正義と悪の大基準であり、罪と神聖をはっきりと定義づけている。金の糸のようにわたしたちの生涯を貫いている聖書の生ける原則は、わたしたちの試練や誘惑への唯一の保護手段である。聖書はわたしたちに真理の道しるべを示す海図である。この海図をよくわかっている者は、どこへ行くようにと召されても確信をもって義務の道に歩むことができる。(レビュー・アンド・ワルド 1908 年 6 月 11 日)

神のみ言葉を信じなくなると、魂に対する何の指導も保護もなくなる。青年たちは、神と永遠の命からかけはなれた道に引きこまれていく。

今日世界に罪悪がこのようなはびこったのは、主としてこのことが原因であろうと思われる。神のみ言葉を無視すれば、人間の生来の悪い感情を制するみことばの力を拒んでしまうことになる。(キリストの実物教訓 18)

神のみ言葉がわたしたちの助言者となり、わたしたちが光を求めて聖書を探求するとき、わたしたちの思いに感銘を与え、理解を助けるために天使がわたしたちのそばちかくにきてくれるので、「み言葉が開けると光を放って」というみ言葉が真実になる(詩編 119:130)。(両親、教師、生徒への勧告 442)

神のみ言葉は光であり真理である。……それは神の都への道のりを一步一步導くことができる。(両親、教師、生徒への勧告 461)

## 誘惑におけるわたしの防衛

「わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました。」(詩編 119:11)

もしわたしたちが偽りと誤りで欺かれたくなければ、わたしたちの心は先に真理で満たされていなければならない。神の御言は敵に打ち勝つために天来の力という武器でわたしたちの心に必要な備えをする。人が誘惑されるとき、自分の魂が聖書の知識で豊かであり、神のみ約束の下に避難所を見出す者は幸いである。詩編記者は「わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました。」と言っている。(サインズ・オブ・タイムズ 1882年6月1日)

このみ言はわたしたちの心と唇に絶えずあるべきである。[と書いてある]とのみ言葉はわたしたちの錨である。神の御言を自分の助言者として受け入れる者は、罪深い、清められていないすべての衝動を抑えるには自分の心がいかに弱く、神の恵みの力がどれほど素晴らしいかに気づく。彼らの心は常に祈りに満たされており、聖天使の庇護がある。敵が洪水のように押し寄せるとき、神の御霊は彼らのために敵に対して旗を掲げて下さる。真理の尊く力強い影響力が支配するので、彼らの心の中には調和がある。(教会への証 6巻 160)

神の御言は生ける神との交わりの通路である。御言で養われる者はすべての良い働きに有益な者となる。彼は隠れた宝を見つけるために働かなければならないが、真理の豊かな鉱脈を発見する。彼が誘惑にさらされるとき、聖霊は最も必要な瞬間に必要なみ言葉を彼の心にもたらし、彼はそれらを効果的に使うことができる。(サインズ・オブ・タイムズ 1895年9月5日)

わたしたちは聖書をもっとよく知らなければならない。もしわたしたちがもっと聖句を覚えるなら、多くの誘惑に扉を閉じることができる。[と書かれている]というみ言葉でサタンの誘惑への道に垣根を造ろう。わたしたちは自分の信仰や勇気を試すための戦いに会うが、イエスが与えようとしておられる恵みによって打ち勝つなら、それらはわたしたちを強めてくれる。しかしわたしたちは、疑わぬでみ約束を掴まなければならないことを信じなければならない。(ビュー・アンド・ヘルド 1884年5月13日)

## そのみ約束はわたしのもの

「なぜなら、神の約束はことごとく、彼において『しかり』となったからである。だから、わたしたちは、彼によって『アメン』と唱えて、神に栄光を帰するのである。」(コリント第二 1:20)

尊い聖書は神の園であり、そのみ約束はゆりやバラ、またなでしこである。(レビュー・アンド・ハラルド 1889年3月19日)

わたしたちが皆、神のみ約束を信じることができればと、わたしはどれほど願っていることか。……わたしたちは天に受け入れられた証拠として、心の内に喜ばしい感情を探すべきではなく、神のみ約束をそのまま受け取り、「それらはわたしのものである。主は聖霊をわたしに宿らせてくださっている。わたしは光を受けている。なぜなら『なんでも祈り求めることはすでにかなえられたと信じなさい。そうすればその通りになるであろう。』とのみ約束があるからである。信仰によってわたしは幕の内に入り、わたしの力であるキリストをつかみ、わたしには救い主がおられることを神に感謝する」と言うべきである。(サイズ・オブ・タイムズ 1889年3月25日)

聖書は単に書かれたものとしてだけでなく、わたしたちに向かって語られた神のみ言葉として受けなければならない。病人がキリストのところに来たとき、キリストはそのとき助けを求めた者だけをご覧になったのではなく、同じ要求同じ信仰をもってキリストに来る各時代の人々をもごらんになっている。中風の人に向かって「子よしっかりしなさい。あなたの罪は許されたのだ」と言われたときも、カペナウムの婦人に向かって「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心していきなさい」と言われたときも、イエスに助けを求めなければならない他の病人や罪に悩む人々に向かって語られたのであった。

神のみ言葉の約束はみなそうである。それらの約束を通して神はわたしたち一人一人に向かって語られ、また直接にみ声を聞いているかのように語っておられる。これらの約束によってキリストは恵みと力をわたしたちにお与えになる。それは「万国の民をいやす」木の葉である。これを受け入れ自分のものとするとき、品性の力となり、靈感が与え、生命を維持するものとなる。(ミストリー・オブ・ヒーリング 92)

青年に無限の力ある手をつかませなさい。信仰は訓練によって成長する。約束によって生きなさい。神のみ言葉の単純なみ約束に頼って満足していなさい。(エース・インストラクター 1893年3月23日)

キリストの尊いみ言葉を記憶の部屋に掛けなさい。それらは金や銀よりはるかに価値がある。(教会への証 6巻 81)

## 全人類のための教科書

「なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである。」(ペテロ第二 1:21)

神は有限な人間にご自分の神聖な靈感をお与えになったみ言葉をお委ねになった。旧約、新約聖書として本にまとめられたこのみ言葉は、墮落した世界の住民への導きとなって、その指導を研究し、従うことによってだれ一人天国への道を見失わないことを彼らに伝えている。(エレキッド・メッセージ 1 巻 16)

聖書は、神をその著者として指し示す。しかし、それは人間の手で書かれた。そしてその種々の書の異なった文体は、それぞれの記者の特徴を表わしている。そこにあらわされている真理は、みな「神の靈感を受けて書かれたものであるが、それは人間のことばで表現されている(テモテ第二 3:16)。限りなきおかたである神は、聖霊によって、ご自分のしもべたちの心と頭に光をお与えになった。神は、夢とまぼろしと象徴をお与えになった。そして、このようにして真理を啓示された人々は、その思想を人間のことばであらわしたのである。(各時代の犬争闘上巻序文 I, II)

主は人間に不完全な言葉で話しておられる。それは人間の退化した感覚や、鈍い、世的な理解力でも主のみ言葉を悟ることができるためである。神の謙遜がこのように示されている。神は墮落した人類に彼らがおる処でお会いになる。単純明快であり、なおかつ完全である聖書は、神の偉大なお考えを解くことはしない。なぜなら、無限なお方の考えを思想において有限な伝達者が、完全に具体的に表現することはできないからである。聖書の表現は多くの人が考えているように誇張されたものではない。執筆者たちは上からの教育により真理を伝えるため、最も適切な言葉を選んでいますが、神の思想の荘厳さの前には力強い表現も圧倒されてしまうのである。(エレキッド・メッセージ 1 巻 22)

神は聖書を、全人類にとって、幼年時代、青年時代、壮年時代の教科書となり、全生涯にわたって研究すべきものとなるよう意図された。神は聖書を、ご自分の啓示として人間にお与えになった。……それは、神と人間とが交わる手段である。(各時代の犬争闘上巻 70)

## 天からの聖書

「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。」(コリント第二 4:7)

神は、ご自分の真理を、人間を通して世にお伝えになった。そしてご自分の聖霊によって、人々に、この働きをなす資格と能力をお与えになった。神は人を導いて、語るべきことと書くべきことをえらばせられた。宝は土の器である人間に託されたが、しかしその宝が天来のものであることにはかわりがない。……神を信ずる従順な子らは、その〔神の証の〕中に、恵みと真理とに満ちた、神の力の栄光を見るのである。(各時代の大争闘上巻序文Ⅲ)

聖書の執筆者たちは彼らの思想を人間の言葉で表さなければならなかった。聖書は人間によって書かれた。この人たちは聖霊によって靈感を受けていた。言語について人間の理解は不完全であり、心は強情であって、真理を避けるのが上手であるゆえに、多くの者は自分を喜ばせるために聖書を読み、解釈する。問題点は聖書の中にあるのではない。……

聖書は鎖でつながっているように連続した話としてではなく、各時代を通じて、少しずつ人間に与えられた。神はみ摂理のうちいろいろな時期にさまざまな場所でも人間に感銘を与えるにふさわしい機会を見ておられた。人は靈感を受けた時に書いた。……

聖書は常に順序正しく、はっきりと統一がとれて書かれているわけではない。……聖書の真理は隠れた真珠のようなものである。探し、徹底的に努力して掘り出さなければならない。聖書の表面に出てくるものだけをとる者は、自分の浅い知識で、自分の考える事柄が非常に深いものだと思ってしまう、聖書を否定したり、聖書の権威に疑問を抱いたりする。しかし、自分の心が真理や義務と調和している者は、天来の感動を受ける心の準備をして聖書を調べる。天来の光に照らされた魂は霊的な一致、すなわち一本の壮麗な金糸が全体を貫いているのを見る。しかしこの尊い金糸を探し出すには、忍耐と熟考と祈りが要求される。(セレテッド・メッセージ 1 卷 19, 20)

## 聖書はすべて神の靈感を受けている

「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。」(テモテ第二 3:16)

神のことばとは旧約聖書と新約聖書の両方を指している。どちらが欠けても完全ではない。(キリストの実物教訓 104)

新約聖書と同様、旧約聖書にも注目すべきである。わたしたちが旧約聖書を研究するとき、不注意な読者がただ砂漠であると見なしたところに生き生きとしたあふれる泉を見出すであろう。(両親、教師、生徒への勧告 462)

旧約聖書と新約聖書の間には調和がある。旧約聖書の中でわたしたちは救い主来臨の福音を見出し、新約聖書の中には預言があらかじめ述べたとおりに来られた救い主の福音が記されている。旧約聖書がたえず前方に真のいけにえを指し示している一方、新約聖書は犠牲制度であらかじめ示されていた救い主が来られたことを示している。ユダヤ時代のおぼろげな栄光は、クリスチャン時代になって、もっと明るく、もっとはっきりとした栄光へと引き継がれた。(SDA バイブル コメンタリ [E.G. コット・コメント] 6 巻 1095)

家長たちに示されたキリスト、犠牲制度に象徴され、律法に描かれ、預言者によって、啓示されたキリストが、旧約聖書の宝である。キリストの生涯、死、復活、それに、聖霊によってあらわされたキリストが、新約聖書の宝である。父の栄光の輝きであられるわたしたちの救い主は、旧約であると同時に新約でもあられる。……旧約聖書は、新約聖書を照らし、新約聖書は旧約聖書に光を投げかける。両者ともに、キリストによってあらわされた神の栄光の啓示である。どちらも、真理を示していて、熱心な探究者にたえず新しい意義深さを啓示する。(キリストの実物教訓 104～106)

イエスは旧約聖書について、「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」と仰せになったが(ヨハネ 5:39)、新約聖書については、なお一層そうである。……聖書全体がキリストのことを述べている。創造の最初の記録「できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」(ヨハネ 1:3) から、最後のみ約束「しかり、わたしはすぐに来る」(黙示録 22:12) に至るまで、わたしたちはキリストのみわざについて読み、み声を聞いている。もしあなたが救い主のことを十分に知りたいのなら、聖書を研究しなさい。(キリストへの道 119, 120)

## 誤ることのない啓示

「主のことばは清き言葉である。地に設けた炉で練り、七たびきよめた銀のようである。」(詩編 12:6)

神は、みことばを通して、救いに必要な知識を人間にお与えになった。われわれは、聖書を、神のみことばについての権威ある、まちがいのない啓示として受けとらねばならない。聖書は品性の規準であり、教理を示すものであり、経験を吟味するものである。(各時代の争闘上巻序文Ⅲ)

靈的暗闇が地をおおい、濃い暗闇が人々をおおっている。……非常に多くの者が、聖書の真理と正確さに疑問を投げかけている。人間の理論や想像力が神のみ言葉の靈感を侵食しており、そのまま受け入れるべき神のみ言葉が神秘の雲に包まれている。すべてのことがはっきりと明確な方針のもとに立っておらず、堅い岩を基盤としていない。これは最後の時代のしるしの一つである。……

独創的であろうとする人々、すなわち書かれていることに超越した賢い者がいる。それゆえに、彼らの知恵は愚かなのである。……各時代にわたって有限な人間には隠されてきた神秘を明らかにし、解明しようとする者は泥の中でもがいている人である。彼自身泥の中から出られないのに、同じように泥の中にいる他の人々にその泥から出る方法を教えているようなものである。聖書の間違いを直そうとする人はちょうどこのような人である。だれも聖書を書きかえることはできない。聖書は主によって言われた言葉通りのものである。……

わたしは聖書をそのまま靈感のみ言葉として受け入れる。わたしは聖書全体をそのみ言葉どおりに信じる。(セレクド・メッセージ 1巻 15～17)

この聖書はサタンの攻撃を受けてきた。サタンは聖なるものすべてを雲と暗闇で覆い隠そうとして悪人と一緒に協力してきた。しかし主はこの聖なる書物をご自身の奇跡的なみ力で、そのままの形に保ってこられた。これは天国への道を人類家族へ示す案内者また案内図である。……

聖書が教育を受けた者ばかりでなく、貧しい者のためにも用意されていることをわたしたちは神に感謝する。この聖書はどの時代の者にも、またどの階層の者にもふさわしいものである。(セレクド・メッセージ 1巻 15～18)

## はかりしれない神秘

「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。」(ローマ 11:33)

神のみ言葉には、その著者である神のご性質と同じく、限りある人間には十分に理解できない神秘がある。……

もし、造られたものが神とそのみわざをことごとく理解できて、すでにそこまで行けば、それ以上の真理の発見もなければ、知識の成長もなく、頭脳や心の発達も止んでしまう。そうなれば、神はもはや至上者ではなくなり、知識と学識に到達した人類には進歩の余地がなくなるであろう。しかし、そうでないことを神に感謝しなければならない。神は無限であられる。神に「知恵と知識との宝が、一切隠されている」とある(コロサイ 2:3)。そして人は永遠に求め学び続けても、神の知恵、神の慈悲、神の力の財宝は決して尽きることはない。(キリストへの道 147, 151)

自然界においてもわたしたちの分からない神秘がいつも身の回りに起こっている。……霊的世界においてもわたしたちの測り知ることができない神秘があるからといって驚くにはあたらない。(キリストへの道 147)

聖書の神秘は、……聖書が神の靈感によるものであることの最も強力な証拠である。聖書に、神についてわれわれが理解し得ることしか書かれてなかったり、あるいは、神の偉大さと尊厳さが有限な人間の心によって把握できる程度のものであったなら、聖書は現在のようにはっきりした神性の証拠を持たなかったであろう。……聖書を調べればしらべるほど、それは生ける神のみ言葉であるとの確信が深められ、人間の理性は神の尊厳の前にひれふすのである。(教育 201, 202)

キリストは贖われた者たちを命の川のほとりへ導かれ、彼らがこの地上にいる間は理解できなかったことを明らかにして下さる。(SDA バイブル・コメント [E.G. ホイト・コメント] 5 卷 1124)

御座から輝き出る光の中で神秘は消えうせ、以前には少しも分からなかったことからの単純さに魂は驚きで満たされる。(教会への証 8 卷 328)

## 永続する書物

「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない。」(マタイ 24:35)

キリストは、聖書が疑問の余地のない権威書であることを指摘されたが、わたしたちもそうすべきである。聖書は、無限の神のことばであって、あらゆる論争の解決とすべての信仰の基礎であることを示すべきである。(キリストの実物教訓 16)

かつて無神論者ボルテールは、次のように自慢して言った。「十二人がキリスト教を設立したということを、わたしはもう聞き飽きた。わたしは、それをくつがえすのにひとりで十分であることを証明しよう。」……幾百万の者が、聖書に対する戦いに加わった。しかし聖書は、滅びるところか、ボルテールの時代に百あったところには、一万、いや十萬の神の書があるのである。ある初期の改革者は、キリスト教会に関して、「聖書は多くの金づちをすりへらしたかなとこのようなものである」と言った。「すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる」と主は言われた(イザヤ書 54:17)。(各時代の犬争闘上巻 368)

今日、世の人々は、最後の重大な危機を前にして、ノアの洪水前の人々と同じように、享楽に心を奪われ、肉欲にふけている。彼らは目の前のはかないものに夢中になって、目に見えない永遠のものを見おとしている。使えばなくなるような物のために、彼らは、滅びることのない富を犠牲にしている。……聖書のページに明らかにされている諸国民の興亡を通して、われわれは、単なる外面的で世俗的な栄光がどんなにむなしいものであるかを学ばなければならない。(教育 217)

神のみことばは、この世界の中で唯一のゆるがないものである。これが確かな基である。「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」とイエスは言われた。(祝福の山 185)

「われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない。」「すべてのさとしは確かである。これらは世たかぎりなく堅く立ち、真実と正直をもつてなされた」(イザヤ書 40:8; 詩篇 111:7, 8)。人間の権威の上に建てられたものはみな崩れる。しかし、神の不変の言葉の上に基礎をおいたものは、永遠に立つのである。(各時代の犬争闘上巻 368)

## 経験という証拠

「主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである。」(詩編 34:8)

すべての人に一最高の教育をうけた者にも、最も無学な者にも一はっきり示される証拠は経験という証拠である。神はみ言葉の真実なこと、み約束の真実であることをわたしたち自らがためしてみるようにと仰せになった。神はわたしたちに「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇 34:8)とお命じになった。ほかの人の言葉に頼らないで、自分で味わってみなければならぬ。……そしてわたしたちがイエスに近づき、イエスのあふれる愛にひたるとき、イエスの臨在の光にわたしたちの疑いも暗きも消え去ってしまうのである。(キリストへの道 155, 156)

クリスチャンは自分がだれを信じてきたかを知っている。彼は聖書を読むだけではない。彼はその教えの力を経験するのである。彼はキリストの義について聞くだけではない。彼は魂の窓を義の太陽の光に向かって開いてきたのである。(エズ・インストラクター 1902年12月4日)

死より生へ移った人々はだれでも「神がまことであることを、たしかに認め」ることができる(ヨハネ 3:33)。そして、その人は次のように証することができる。「わたしには助けが必要でしたが、その助けは、イエスから与えられました。すべての欠乏は補われ、魂の飢えは満たされました。今では、聖書はわたしにとってイエス・キリストの啓示となりました。わたしがどうしてイエスを信ずるかとお尋ねになりますか。それは、イエスはわたしにとっては天よりの救い主であるからです。どうしてわたしが聖書を信ずるかといえば、それは、聖書がわたしの魂にとって神のみ声であることがわかったからです」と。わたしたちは体験によって聖書は真実であり、キリストは神の子であるということを証することができる。そして、巧みな作り話を信じているのではないということを知ることができるのである。(キリストへの道 156)

青年たちに神の御言を思いと魂の食物とさせなさい。……このように信仰を通して彼らは体験的知識によって神を知るようになるからである。神の御言が現実のものであることとみ約束が本当であることを彼らは自分の体験によって試してきた。彼らは主がいつくしみ深いことを味わってみて、それを知っているのである。……神のご品性のより明らかな現われのために、高く高く、さらに高いところにまで到達するのはわたしたちの特権である。……このお方の光のうちにわたしたちは光を見て、ついに思いと心と魂は神の神聖なみかたちに変えられる。(教会への証 8巻 320～322)

## 生ける御言キリスト

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。」(ヨハネ 1:14)

イエスは神の言と呼ばれている。このお方は御父の律法を受け入れ、ご自身の生涯を通じて、その原則を実行し、その精神をあらわし、心にあるその慈しみ深い力を示された。使徒ヨハネは次のように言っている。「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた」。(教会への証 5 巻 576)

人が神について知る必要のあること、もしくは知ることのできることはすべて、神の御子の生涯と品性に表されてきた。……

キリストは人性をとって人類と一つとなるために、またそれと同時に、罪深い人間に天におられる御父をあらわすためにも来られたのである。このお方はあらゆる点において兄弟たちと同じようになられた。このお方はわたしたちと同じように肉体をとられた。このお方は空腹や渇き、また疲れを覚えられた。食物で生命をささえられ、睡眠で元気を回復なさった。このお方は人間と運命を共になさったが、しかしなお、傷のない神の御子であられた。……

優しく、あわれみ深く、同情的で、絶えず他の人々のことを思いやられ、キリストは神のご品性を表された。そして常に神と人への奉仕に携わっておられた。(教会への証 8 巻 286)

キリストに従う者は、御子のなさった体験にあずからなければならない。彼らは、神のみ言葉を消化吸収しなければならない。彼らはキリストの力によって主と同じすがたに変わり、神のご性質を反映しなければならない。……キリストの精神と働きが弟子たちの精神と働きにならなければならない。(教会への証 5 巻 576)

聖書の研究において、改心した魂は神の御子の肉を食べ、血を飲むのである。このことについて、御子ご自身が、霊であり命であるご自分のみ言葉を受け、実行することであると説明なさった。言は肉体となって、わたしたちのうちに、すなわち神のみ言葉の聖なる教訓を受け入れる者のうちに住まわれる。世の救い主は、全人類のために聖なる純粋な模範を残された。聖書はその神聖な要求に従う者すべてを、照らし、高め、永遠の生命をもたらす。(クリスチャン教育の基礎 378)

## 力の秘訣

「若い人はどうしておのが道を清く保つことができるでしょうか。み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません。」(詩編 119:9)

聖書をりっぱな道徳的な教訓の書として取り扱い、時代の精神や世における自分の立場と両立するかぎりこれに聞き従うことと、聖書をその真の姿のままに、すなわち生ける神のみ言葉として、われわれの生命の言葉として、またわれわれの行為や言語や思想を形成する言葉としてみることは全然別である。神のみ言葉を神のみ言葉以外のものとして見ることは、これをしりぞけることである。(教育 307)

神のみ言葉は品性の探知機であり、動機の試験機である。わたしたちは神が与えようとしておられる印象を受けるために心と思いを開いてこのお方のみ言葉を読むべきである。わたしたちは、み言葉を読むことが、そのみ言葉の表しているお方、すなわちその背後に立っておられるお方だけがなし遂げることのできることを、成し遂げると考えてはならない。ある者は自分たちが真理の教理をしっかりとつかんでいるから、自分たちは真理を受ける者にもたらされると、これらの教理が宣言している祝福を実際に持っているという結論に急ぐ危険がある。多くの者は真理を外庭においでいる。その聖なる原則が言葉、思想、行動に対して支配力を持っていない。(ビュー・アンド・ハルド 1901年10月1日)

この危険に満ちた時代、すなわち不道徳と墮落への誘惑がいたるところにあふれている時に、青年たちは天に向かって真剣な心からの叫びを上げるがよい、「若い人はどうしておのが道を清く保つことができるでしょうか」。そしてその答えの中に与えられる次の教えに耳を開き、それに従うために心向けよう、「み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません」。汚れに満ちた今の時代にいる若者にとって唯一の安全は、神に信頼を置くことである。天来の助けなくして、彼らが肉欲、情欲を制するのは不可能である。キリストのうちにこそ、まさに必要とされている助けがある。(教会への証 2巻 409)

真理は魂の奥底へ到達しなければならない。そしてキリストの精神に似ていないものをすべて清め、そのあいた所は、純粋で汚れのないお方のご品性をあらわす性質で満たさなければならない。こうして心からわきでるものはみな花のように芳香にかおり、甘くかぐわしい香りとなり、命から命へ至る香りとなるためである。(原稿 1897年 109)

## 御言により生まれる

「あなたがたが新たに生れたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変ることのない生ける御言によったのである。」(ペテロ第一 1:23)

心が変化して神の子となることを、聖書では生れると言っている。また、農夫のまいた良い種が芽を出すことにもたとえている。……こうして自然界のいろいろの例があげられて、わたしたちに靈的生活の不思議な真理が理解しやすいようになっている。人間がどんなに知恵と技巧を注いでも、自然界の一番小さなものにさえ、その中に生命をつくり出すことはできない。植物にせよ動物にせよ、生きることができるというのはただ神の与えてくださるいのちによるのである。同じように、神から出るいのちによってのみ、靈的生命が人の心のうちに生れるのである。(キリストへの道 88, 89)

真理が生活の中の不動の原則になるとき、魂は「朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変ることのない生ける御言によ」って「新たに生れ」る。この新生は、キリストを神のことばとして受け入れた結果である。聖霊によって神の真理が心に刻まれると、新しい思いが喚起され、これまで眠っていた力が呼びさまされて神と協力する。……キリストは、真理をこの世にあらわされるかたであった。キリストによって、朽ちない種— 神のみことば— が人々の心にまかれた。(患難から栄光へ下巻 219)

みことばは、生れながらの世俗的な性質を滅ぼし、イエス・キリストのうちにある新しいいのちを与える。聖霊は、助け主として魂にくだる。人を生れ変らせる神の恵みの力によって、神のみかたちが、弟子のうちに再現され、彼は新しい人間となる。愛が憎しみに入れ代り、心は神のみかたちにかたどられる。(各時代の希望中巻 141)

であるから、あなたがたは自分のものではなく、価をもって買われたものである。「あなたがたが……あがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、……キリストの尊い血によったのである」(ペテロ第一 1:18, 19)とある。神を信ずるこの簡単な行為によって、聖霊はわたしたちの心に新しいいのちを与えて下さる。わたしたちは神の家族の子供として生れたのである。であるから、神はみ子を愛されると同様にわたしたちを愛してくださるのである。(キリストへの道 66, 67)

## わたしの魂の糧

「イエスは答えて言われた、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある」。 (ルカ 4:4 英語訳)

神の御言がわたしたちの霊的食物となるべきである。(ビュー・アソト・ヘラルド 1906年3月29日)

世の人々にいのちを与えるキリストのいのちは、そのみことばのうちにある。イエスが病気をいやし、悪鬼を追い出されたのはそのみことばによってであった。そのみことばによって、主は海を静め、死人をよみがえらせられた。……

われわれの肉体の生命が食物でささえられるように、われわれの霊的生命は、神のみことばによってささえられる。だからどの魂も、神のみことばから自分のためにいのちを受けるのである。栄養をとるには自分が食べねばならないように、われわれは、自分自身でみことばを受け入れねばならない。……

イエスの約束と警告の中には、わたしのことが言われている。……神のみことばのうちに述べられている経験はわたしの経験となるのである。祈りと約束、教えと警告はわたしのものである。(各時代の希望中巻 139, 140)

すべての世界を出現させた創造のエネルギーは、神のみ言葉のうちにある。神のみ言葉は能力を与え、生命を生ぜしめる。神のご命令の一つ一つは約束であって、意志がこれに同意し、魂がこれを受け入れるときに、そこには同時に限らない神の生命がもたらされる。……

このようにして与えられた生命は、また同じようにして維持される。人は、「神の口から出る一つ一つの言」によって生きなければならない(マタイ 4:4)。心と魂はかてによって築かれる。どんなかてをとるかを決めるのは、われわれ自身の責任である。われわれの思いを占め、品性を形造る話題の選択は、各人の能力の中にある。(教育 135, 136)

若い方々よ、神の御座のそばでまもなく共に会うあなたがたにわたしはイエスの御名によって嘆願するが、「あなたの聖書を研究しなさい」。この聖書は昼に雲の柱であるばかりでなく、夜は火の柱となることがあなたがたにわかるであろう。聖書はあなたがたの前に上へ導く道、さらに上って、あなたがたに前進するようにと命じる道を開く。聖書—あなたはこの聖書の価値がわかっていない。これは思いのため、心のため、良心のため、意志と命のための本である。それはあなたに向けた神のメッセージであり、その単純な文体により、小さな子供でも理解できる。聖書—なんと尊い本であることか。(原稿 4, 1880年)

## 神のみ言葉の中にある命

「人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。」(ヨハネ 6:63)

どの種の中にも発芽力がある。種の中に植物の命が含まれている。そのように、神のことばには命がある。「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」……とキリストは言われる。神のことばの中にあるすべての命令とすべての約束には、力、すなわち、神の命そのものが宿っている。それであるから、命令はなしとげられ、約束は果たされる。信仰によって、ことばをうけいれる者は、神の命と品性そのものを受けているのである。(キリストの実物教訓 15)

このみ言葉にあずかることによってわたしたちの霊的強さが増し加えられる。わたしたちは真理の知識と恵みに成長する。克己の習慣が作られ、強められる。子供のような弱さ、いらだち、強情、軽率な言葉、感情に任せた行動一が消えうせ、その代わりにクリスチャン成人男女にふさわしい美徳が発達する。(両親、教師、生徒への勧告 207)

その力によって、男も女も、悪い習慣の鎖を断ち切り、利己心を放棄した。神を汚す者は神を敬う者となり、酔っぱらいはまじめになり、道楽者は身を慎むようになった。サタンの面影を宿していた魂は神のみかたちに一変させられた。(教育 203)

あなたは神のかたちに同化したいと望むであろうか。……あなたはキリストがあなたに与える水、すなわちあなたの中で永遠の命となってあふれ出る井戸となる水を飲みたいであろうか。あなたは神の栄光のために実を結びたいであろうか。あなたは他の人々を活気づけたいであろうか。それなら、命のパンである神のみ言葉に飢え渴いた心で聖書を調べ、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きなさい。神のみ言葉はその命令の従順へと導き、その神の御言を信じる信仰の結果は、あなたの魂の聖化と義である。神の御言があなたにとって、「これは道だ、これに歩め」とあなたを教えて語られる神の御声となるようにしなさい(イザヤ 30:21)。キリストは「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります」と祈られた(ヨハネ 17:17)。(サインズ・オブ・タイムズ 1895年9月5日)

## わたしの前に備えられた食卓

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。」(ヨハネ 6:54, 55)

永遠の命とは、聖書の中の生きた要素を受け入れること、すなわち神の御旨を行うことである。これが神の御子の肉を食べ、血を飲むという意味である。み言葉を研究することにより天来のパンを食べ、霊的な腱と筋肉をつけることはすべての者の特権である。(ビュー・アンド・ワルド 1901年10月1日)

各自が祝福を自分の魂のものとしなければならない。さもないと養われない。……食卓の上に並べられたごちそうを眺めるだけで、他の人が食べてしまうのでは自分の栄養にならないことをあなたは知っている。もしあなたが肉体の栄養を摂らなければ、飢えてしまうのと同じく、もしあなたが霊のパンを食さないなら、霊的力と活力を失ってしまう。……

食卓に料理は並び、キリストはごちそうを食べるようにとあなたを招いておられる。わたしたちはしりごみして、このお方の恵みを拒み、「主はこのごちそうをわたしのために用意なさっているのではない」と言い張るのだろうか。わたしたちは、ある幸せな家族が優しい父親の招待で恵みにあふれた食事を分かち合うため集っている祝宴を描写した賛美をよく歌ったものだ。幸せな子供たちが食卓に集まっていたとき、お腹のすいた乞食の子供が戸口に立った。この子は中に入るように招待されたが、悲しげに「そこにお父さんがいない」と叫びながら立ち去った。イエスがあなたに入ってくるようにと招いておられるときにあなたは同じことをするのだろうか。ああ、もし天の宮殿におられるお方があなたの御父なら、あなたがその事実をあらわすようにわたしは懇願する。主はあなたがご自分の豊かな恵みと祝福にあずかる者となるように願っておられる。幼児のような信頼に満ちた愛をもって近づく者は皆そこに御父を見出すのである。(ザイン・オブ・タイムズ 1889年3月5日)

いのちの泉に来て飲みなさい。泉に近づこうとせずに、のどが渴いたとつぶやいてはならない。命の水はすべての者が自由に飲めるのである。(オーストラリア連合総会記録 1903年10月1日)

このみ言葉を食して消化し、これを自らのすべての行動と品性の特質の一部とする者は、神のみ力のうちに力強く成長する。このみ言葉は魂に不朽の活力を与え、経験を完成し、永遠にとどまる喜びをもたらす。(ビュー・アンド・ワルド 1908年6月11日)

## 神性につながる

「また、それらのものによって、尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである。」(ペテロ第二 1:4)

救い主は自ら人間の弱さを受け、罪のない生涯を送られたが、それは、人性の弱さのために勝利することができないと人間が恐れるようなことがないためであった。(ミストリー・オブ・ヒーリング 156)

「この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」とイエスは言われた(ヨハネ「この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」とイエスは言われた(ヨハネ 14:30)。イエスの中にはサタンの詭弁(きべん)に応ずるものは何もなかった。イエスは罪に同意されなかった。一つの思いにおいてさえ、彼は試みに負けたまわなかった。われわれもそうなるのである。キリストの人性は神性と結合していた。イエスは聖霊の内住によって戦いに備えられた。しかもイエスはわれわれを神のご性質にあずかる者とするためにおいでになったのである。われわれが信仰によってキリストにつながっているかぎり、罪はわれらの上に権をとることはできない。(各時代の希望上巻 135)

わたしたちは一つとして罪深い傾向を持ち続ける必要はない。……わたしたちが神性にあずかるようになるとき、先天的また後天的な悪への傾向は、わたしたちの品性から切り取られ、わたしたちは善のための生きた力とされる。常に神聖な教師から学び、日ごとに神性にあずかることによって、わたしたちはサタンの誘惑に打ち勝つことにおいて、神と協力するのである。(SDA パイブル・コメント [E.G. ホリト・コメント] 7巻 43)

キリストは、これが達成される方法をわれわれにお示しになった。イエスはサタンとの戦いにどんな手段で勝利されただろうか。神のみことばによってである。みことばによってのみ彼は試みに抵抗することがおできになった。「こう書かれている」とイエスは言われた。「それらのものによって、尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、……神の性質にあずかる者となるためである」。……神のみことばの中にある約束はどれもみなわれわれのものである。……試みに攻撃された時には、周囲を見たり、自己の弱さを見たりしないで、みことばの力を見なさい。その力はすべてあなたのものである。(各時代の希望上巻 135, 136)

キリストのみ約束を命の木の葉のようにつかみなさい。「わたしに来る者を決して拒みはしない」(ヨハネ 6:37)。キリストの許へに行くときに、キリストがお約束なさったのだから、自分を受け入れてくださると信じなさい。そうするとき、あなたは決して滅びることはない、決して。(ミストリー・オブ・ヒーリング 40, 41)

## 創造の由来

「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを、悟るのである。」  
(ヘブル 11:3)

この世界の創造について、わたしたちに信頼のおける記述をしているのは、ただ神のみ言葉だけである。(両親、教師、生徒への勧告)

神がこの世界を出現させられたとき、創造の働きをなさらなかったという説には根拠がない。この世界の創造にあたり、神は、すでに存在していたものをあてにされたのではなかった。反対に、物質的なものであろうと、霊的なものであろうと、すべてが御声によって主エホバのみに生じ、主のご目的通りに創造された。天とその万軍、また地とそこにあるすべてのものは、主のみ手のわざであるばかりでなく、み口から出る息によって存在するに至ったのである。(教会への証 8 巻 258, 259)

自然界には個性と多様性があるが、その多様性の中に一貫性がある。なぜならすべてのものはその有用性と美しさを同じ源から受けているからである。偉大な芸術家であられるお方はご自分が創造なさった事物すべてのものに、レバノンの気高くそびえる香柏から壁に生えるヒソブに至るまでご自分のみ名を記された。それらはみな、高くそびえる山々や雄大な海から海辺の最も小さな貝に至るまで、み手のわざをあらわしている。(ウォッチマン 1907 年 12 月 17 日)

このお方は夜を造られ、大空に輝く星を並べられた。このお方はそれらをみな、名をもって呼ばれる。もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざを示し、人にこの小さな世界は神の創造の一点にしか過ぎないことを示している。(SDA バイブル・コメント [E.G. 初ト・コト] 3 巻 1154)

科学を深く研究した者ならば、自然の中に無限の力の働きをみとめないではいられない。しかし、人間の独断的な理性には、自然の教えは、矛盾と失望を与えるだけである。それは聖書の光に照らしてはじめて、正しく解釈される。「信仰によって、わたしたちは、……悟る」のである。

「はじめに神」とある(創世記 1:1)。まじめな探求心をもった人は、箱舟に飛び帰ったはどのように、ここにはじめて落ち着きを見いだすことができる。限りない愛の神は、上にも下にもあなたにも住まれて、「善に対するあらゆる願い」を成就するために(テサロニケ第二 1:11)、すべてのことをなされるのである。(教育 146, 147)

## 自然は神について語る

「野の花のことを考えて見るがよい。紡ぎもせず、織りもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」(ルカ 12:27)

すべての造られたものは、初めの完全な状態にあったとき、神の思想を表現していた。エデンの家庭にいたアダムとエバにとって、自然界は、神の知識に満ち、神の教訓にあふれたものであった。知恵は、彼らの目からはいて、心にたくわえられた。なぜなら、彼らは、神の創造されたものによって、神と交わったからである。……地球は、罪にそこなわれてしまった。しかし、その破壊された状態にあっても、なお、美しいものが多く残っている。(キリストの実物教訓 2)

なぜ天父は地に茶色や灰色を敷きつめられなかったのでしょうか。このお方は最も休まり、最も感覚に受け入れられやすい色をお選びになった。生き生きとした緑に覆われた地を眺めることは、いかに心を元気づけ、疲れた精神を清新にすることであろう。……一つ一つの草の葉先、一つ一つのつばみや開花は、神の愛のしるしであり、わたしたちにこのお方への信仰と信頼の教訓を教えるべきである。(SDA パイブル・コメント [E.G. 初巻・コメント] 5 巻 1087)

自然の美には絶えずわたしたちに語りかける言葉がある。開かれた心は、み手のわざに見られる神の愛と栄光に感銘を受ける。聞こうとする耳は、自然の事物を通して語られる神のみ言葉を聞き、悟ることができる。日光の中に教えがあり、神がわたしたちの視界にあらわして下さる自然のさまざまな事物の中に教えがある。緑の野原、高い木々、花や蕾、過ぎゆく雲、降り注ぐ雨、小川のせせらぎ、太陽、月、空の星、これらすべてがわたしたちの注意を引き、瞑想させる。(ユース・インストラクター 1898 年 3 月 24 日)

裕福な人だけが買うことのできる人工的な壮麗さに、高価な絵画や家具や衣服のため息をついているあなたは、神聖な教師のみ声に耳を傾けなさい。このお方はあなたに野の花を、すなわち人間の技能によっては匹敵することのできない単純な意匠を、指し示される (SDA パイブル・コメント [E.G. 初巻・コメント] 5 巻 1087)

神は美を愛されるが、外面的のどんな美しさよりも、品性の美を愛される。神はわたしたちが、花のように、純潔、単純で、静かなやさしさを培うよう望んでおられる。(キリストへの道 116)

## 天は教えている

「目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ。主は数をしらべて万軍をひきいだし、おのおのをその名で呼ばれる。その勢いの大きいなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない。」(イザヤ 40:26)

神の偉大な書である自然は、わたしたちが研究するために開かれており、そこからわたしたちはこのお方の偉大さと他にまさるもののない愛と栄光について、より高い知識を得るべきである。このお方は……ご自分の子らがご自分のわぎを感謝し、彼らの地上の家を飾られた単純で静かな美しさを喜ぶよう望んでおられる。(SDA バイブル・コメンタリ [E.G. 初巻・コメント] 5 巻 1087)

神はご自分の被造物にまわりの混乱や困惑から、ご自分のみ手のわぎに注意を転じるようにと呼びかけておられる。天体は瞑想に価する。神はそれらを人の益のために造られた。そしてわたしたちがこのお方のみわぎを研究するとき、神の御使たちがわたしたちの思いを啓発し、それらをサタンの欺瞞から守るために傍らにいたのである。(SDA バイブル・コメンタリ [E.G. 初巻・コメント] 4 巻 1145)

若い方たちよ、夜外に出て、大空の栄光に輝く星々を見てみなさい。高価な金がちりばめられたような天にある光の宝石を見上げなさい。栄光の富がそこにあるが、幾百万の人の心はあまりに鈍く、この宝の価値を認めることができない。それは内にある人知を超えた栄光を証するため、わたしたちの感覚の前に外へつるして下さったほんのわずかな天の一部分にすぎない。(手紙 41、1877 年)

わたしたちは単に天を眺めるだけであってはならない。わたしたちは神のみわぎを熟慮すべきである。神はわたしたちが無限のお方のみ働きを学び、この研究から神を愛し、崇敬し、神に従うよう望んでおられる。(SDA バイブル・コメンタリ [E.G. 初巻・コメント] 4 巻 1145)

神が天におかれた輝く星々は、それぞれ神の指令に従い、夜、大空を美しくするため、それぞれの量りに応じた光を放つ。そのように、悔い改めた魂は自分に委ねられた光を量りに応じて輝かそう。光が輝き出るとき、その光は増し、ますます明るくなる。あなたの光を放ちなさい。……天から反映した光線を注ぎ出さなさい。シオンの娘よ。「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上のぼったから」(イザヤ 60:1)。(SDA バイブル・コメンタリ [E.G. 初巻・コメント] 4 巻 1153)

## 進化ではなく創造

「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた。」(詩編 33:6)

自然という書と神の啓示である聖書には、同じ創造主の印が押されているので、両方の語るところは一致せざるを得ないのである。……

しかしながら、自然の中に観察されるいろいろな事がらから誤った推論が出されたために、科学と聖書の間に矛盾があるかのように想像されている。……地が混沌の状態から進化するには幾百万年の年月を要したと主張されている。そしてこの科学の想像的な啓示に聖書を適応させようとするれば、創造の期間は幾万年あるいは幾百万年という膨大なばくぜんたる年月であったと仮定されるのである。……このような結論は全く無用である。(教育 138, 139)

聖書の記録は、創造週の一日一日が、その後のすべての一日と同様に、夕があり朝があったことを明らかにしている。(人類のあけぼの上巻 30)

創造そのものの働きについては、「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立った」(詩篇 33:9) と天来の証言が与えられている。このように無数の世界を造り出し得る神にとって、地を混沌たる状態から進化させるには、どれほどの期間が必要であったろうか。……

地中から発見される遺物が、現在知られているよりもはるかに大きな人間や動物や植物が生存していたことを証拠だてていることは事実である。……しかしこうしたものについて聖書の歴史は、十分な説明を与えている。ノアの洪水前には、植物や動物の生命の発達は、その後の時代よりも測り知れないほどまぎっていた。洪水のときに地球の表面が破壊され、著しい変化が起こり、地殻が再び形成されるときに以前生存していた動植物の多くの証拠が保存されたのである。……これらのものは光に照らしてみると、神のみ言葉の真実性を無言のうちに立証する多くの証拠である。(教育 139)

神が、どんな方法で創造の働きをなさったかは、人間にあらわされていない。人間の科学は、至高者の秘密をさぐり出すことはできない。神の創造の力は、神の存在と同様に理解することはできない。(人類のあけぼの上巻 32)

## 自然界はすべて神に支えられている

「彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあつて成り立っている。」(コロサイ 1:17)

この地球について、聖書は、創造の働きが完成されたものであることを宣言している。「みわざは世の初めに、でき上がっていた」(ヘブル 4:3) とある。しかし神の能力は、いまなお、お造りになった物をささえるために働いている。……呼吸の一つ一つ、心臓の鼓動の一つ一つは、われわれの生命と活動と存在の根源である神の守りの証拠である。(教育 141)

地が豊かな産物を生じ、年々に太陽の周囲を運行しつづけるのは、地球の固有のエネルギーによるのではない。惑星は人の目に見えない手に導かれて天の軌道をめぐる。(教育 104)

天におられる神はたゆまず働いておられる。植物が繁茂し、葉が出てきて、花が咲くのはすべて神の力によってである。雨の一しずくも、雪一片も、どの草の芽も、葉も花も灌木もそれぞれ神を証している。わたしたちの周りにあたりまえにあるこれらの小さいものは、無限のお方である神の御目に留まらないものはないこと、また小さすぎて神の注意を引かないものは何も無いことを教えている。(教会への証 8 巻 260)

物体には、生命力があると多くの者が教えている。……そして、自然の営みは、一定の法則に従って行なわれていて、神ご自身でさえそれに干渉することはできないと彼らは言う。これは、偽りの科学であつて、神の言葉の支持を受けていない。自然は創造のしもべである。神は、神の法則を破棄したり、それに反して働かれることはないのであつて、かえつて、神の器として常に用いておられる。(人類のあけぼの上巻 34)

自然界における神のみ手の業は、自然界における神ご自身ではない。……自然は神の思想の表現であるが、賛美されるべきは自然界における神であつて、自然そのものではない。(教会への証 8 巻 263)

父とみ子とは、自然のなかで、絶えず働いておられる。キリストはいわれた。「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」(ヨハネ 5:17)。(人類のあけぼの上巻 34)

すべての世界を空間にささえ、宇宙の万物を整然たる秩序と倦むことのない活動の中に保つみ手は、われわれのために十字架に釘づけされたみ手である。(教育 144)

## 創造のみわざの冠

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女に創造された。」(創世記 1:27)

ここに人類の起源が明瞭に述べられている。聖書の記録は、誤った結論を出す余地がないほど明白である。(人類のあけぼの上巻 18)

地球が、数多くの動物と植物で満たされてから、創造主のみわざの冠であり、この美しい地球に住むのにふさわしい人間が、活動の舞台にのぼってきた。……

人間が創造主によって造られたとき、彼は背が高く、完全に均整がとれていた。彼の顔は、血色がよく、生命と歓喜の光に輝いていた。アダムの身長は、今日のだれよりも、はるかに高かった。エバは、アダムよりは少し低かったが、その姿は気高く、美しかった。(人類のあけぼの上巻 18～20)

動物や植物などの下等な生命形態から、次第に発達の段階をたどって、人間は進化したのだと想像する余地は全くない。……星空を高くすえ、野の花を巧みに飾りみ力の奇跡によって、驚くべきものを天地の間に満たされたおかたは、その輝かしいみわざの最後を飾るにあたって、人間をこの美しい世界の統治者としておたてになったが、それは生命の賦与者のわざに恥じないものであった。靈感によって与えられた人類の系図は、その起源を、細菌、軟体動物、四足獣などの進化の跡をたどるのでなくて、偉大な創造主に帰着させる。アダムは、土のちりで造られたが、「神の子」であった。(人類のあけぼの上巻 18)

天使に準ずる者として、「神のかたち」に形づくられた人類家族は、神が創造された御業の内でもっとも高貴なものである。(ユース・インストラクター 1907年 4月 16日)

アダムが創造主のみ手によってつくられたとき、彼の肉体と知能と霊性は、神のみかたちをそなえていた。……神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はっきりと神のみかたちをあらわすこと、すなわちなおいっそう明らかに創造主の栄光を反映することであった。(教育 4)

## あなたの命は何であるか

「命は食物にまさり、からだは着物にまさっている。」(ルカ 12:23)

わたしたちの生命は神によって与えられたものであり、ちょうど木の葉が栄養を主枝に依存しているのと同様に、神に依存している。(ユース・インストラクター 1894年6月21日)

生命は神の愛の現れである。この生命は神がわたしたちにその管理を託されたタラントであって、神の御子の犠牲という光の中で見るとき、非常に高価なタラントである。それは神の所有権の表現である。わたしたちは創造のゆえに神のものであり、贖いのゆえに二重に神のものである。わたしたちは自分の生命を神からいただいている。神は創造主であって、すべての生命の源であられる。このお方こそ、ご自分のかたちに造られた者が持つことを望んでおられる、より高い命の創始者であられる。(手紙 164, 1900年)

各自は次の厳粛な問いを考えるべきである、「神と自分の同胞とに対して、自分の命はどのようなものであろうか」。だれも自分自身で生きているのではない。どの生涯もその結果において単に中立で終わることはない。……

一人びとりの魂はクリスチャンの人生を歩むという義務の下にある。わたしたちの個性、タラント、時間、影響力、能力など、神からわたしたちに与えられたすべてのものは、心からの奉仕によって神にお返しすべきである。人生の目標と目的は、世的な優位性を確保することではなく、永遠の優位性を確かにするためである。神はあなたの魂を、体を、才能を要求しておられる。なぜなら主はご自身の尊い血によって、それらを買われたので、それらは主に属しているからである。神にあなた自身を与えないのは、盗んでいることである。……わたしたちにとって大切な質問は、「わたしたちの生命はイエスの生命に織り込まれているか」ということである。(ユース・インストラクター 1894年6月21日)

クリスチャンの命とは何であろうか。それは救い出された命であり、罪の世から取り出された命であり、キリストの命につく命である。(ユース・インストラクター 1894年6月21日)

もしわたしたちの生命がキリストと共に神の内に隠されているなら、キリストが現れるとき、わたしたちもまた栄光に包まれたキリストと共にあらわれる。そしてこの世にいる間に、神がわたしたちと与えて下さったすべての能力を、わたしたちは聖化された奉仕によって神に捧げるのである。(医療伝道 7)

あなたの命は何であるか。あなたはいつかこの質問に出会い、答えなければならない。(ユース・インストラクター 1894年6月21日)

## 創造の時に制定

「神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。」(創世記 2:2, 3)

偉大なるエホバは、地の基を置かれた。彼は、美しい衣で全世界を飾り、人間のために役立つものを地に満たされた。彼は、地と海に満ちるあらゆる驚異すべきものを創造なさった。創造の偉大なみわざは、六日で完成した。神は「そのすべての作業を終って第七日に休まれた。……神は、そのみ手のわざを見て満足された。あらゆるものは、完全で、創造主である神にふさわしかった。神は、疲労のためではなく、その知恵と恵みのわざとその栄光のあらわれを心から喜んで休まれたのである。

神は、七日めに休まれたあとで、その日を聖別し、人間の休みの日とされた。人間は、創造主の模範にならって、この聖なる日に休むことになった。それは、人間が天と地をながめて、神の偉大な創造のみわざを冥想し、神の知恵と恵みの証拠を見て、創造主に対する愛と畏敬の念に満たされるためである。……

神は、安息日が、樂園においてさえ人類に欠くことのできないものであることをお認めになった。人間は、第七日に自分の興味や楽しみを捨て、神のみわざについて熟考し、神の力と恵みを冥想する必要がある。人間はさらに明瞭に神のことを思い起こし、自分のものとして所有するすべてのものが、創造主の恵み深いみ手から来たことを思って感謝するために、安息日が必要であった。(人類のあけぼの上巻 22, 23)

地の基がすえられ……たその時、安息日の基礎が置かれたのである。この制度がわれわれの崇敬を要求するのは当然である。それは、人間の権威によって命じられたものでも、人間の伝承によるものでもない。それは、日の老いたる者によって制定され、その永遠の言葉によって命じられたものである。(各時代の  
大争闘下巻 178, 179)。

## 聖なる記念日

「主はそのくすしきみわざを記念させられた。主は恵みふかく、あわれみに満ちていられる。」(詩篇 111:4)

神は、エデンにおいて、第七日を祝福して、創造のみわざの記念となさった。安息日は、全人類の父であり、代表であるアダムにゆだねられた。その遵守は、地に住むすべてのものが、神を創造主とし、自分たちの正当な統治者として認めたことをあらわし、自分たちが神のみ手のわざであり、その権威に従うことを快く認める行為ともならなければならなかった。こうして、この制度は全く記念のために、全人類に与えられたのである。そこには、あいまいな点はなく、ある特定の民だけにかぎられることもなかった。(人類のあけぼの上巻 23)

万物は神のみ子によって造られた。「初めに言があった。言は神と共にあった。……すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」(ヨハネ 1:1～3)。安息日は創造のみわざの記念であるから、それはキリストの愛と力のしるしである。

安息日はわれわれの思いを自然に向けさせ、われわれを創造主とのまじわりにはいらせる。鳥の歌に、木々のささやきに、海の調べに、われわれは日の涼しいころエデンの園でアダムとお語りになった神のみ声をいまもきくことができる。こうしてわれわれは、自然界の中に神の力を見るとき、そこに慰めを見いだすのである。なぜなら、万物をおつくりになったみことばは、魂にいのちを語ることばだからである。(各時代の希望上巻 360, 361)

神は人が働くために六日間を与えてくださった。しかしご自分が休まれた日を聖別して、すべての世的な仕事から解放し、その日を守るようにと人間に与えてくださった。このように安息日を他の六日間から分けることにより、神は世に記念日をお与えになった。神は一日を七日間のうちのどの日でも取り分けられたのではなく、特別な日、すなわち第七日目を取り分けられたのである。そして安息日を遵守することにより、わたしたちは神が生ける神であって、天と地の創造主であることを認めていることを示すのである。(牧師への証 136)

もし安息日がいつも清く守られていたなら、無神論者や偶像礼拝者などは決してあり得なかった。(人類のあけぼの上巻 396)

## 特別のしるし

「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである。」(エゼキエル 20:12)

イスラエル人が地上のカナンへ入るためエジプトを出てきたとき、安息日がイスラエルを区別するしるしであったように、いま神の民が天のカナンに入るため世から出てくるとき、彼らを見分けるしるしは安息日である。(教会への証 6 巻 349)

安息日遵守は神ご自身の知識を保つため、また神の忠実な僕と神の律法に違反者を区別するために、神によって定められた手段である。(教会への証 8 巻 198)

それ〔安息日〕はキリストのものである。……キリストは万物をおつくりになったのだから、キリストが安息日をつくられた。キリストによって、安息日は創造のみわざの記念として聖別された。安息日は、キリストを創造主またきよめるおかたとしてさし示す。安息日は、天地の万物をおつくりになって、すべてのものを保っておられるキリストが、教会の首長であられるということ、またキリストの力によってわれわれは神と和解させられるということを宣言している。なぜならキリストは、イスラエルについて語って、「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである」と言われたからである(エゼキエル書 20:12)。だから安息日は、われわれを聖とくださるキリストの力のしるしである。そしてそれは、キリストが聖とされるすべての人に与えられているのである。キリストの聖化の力のしるしとして、安息日は、キリストを通して神のイスラエルの一部となるすべての人に与えられているのである。……

安息日をキリストの創造とあがないの力のしるしとして受け入れるすべての人にとって、この日は楽しみとなる。彼らはその中にキリストをみだし、キリストのうちにあつてよろこぶ。安息日は創造のみわざをあがないにおけるキリストの偉大な力の証として彼らにさし示す。それはエデンの失われた平和を心に呼びもどすとともに、救い主を通して回復された平和を告げている。こうして自然界の事物の一つ一つは、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」とのキリストの招きをくりかえしている(マタイ 11:28)。(各時代の希望上巻 372, 373)

安息日は神と神の民を結び合わせる金の留め金である。(教会への証 6 巻 351)

## 聖日のために備える

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。」(出エジプト 20:8)

律法の第四条の一番最初に、主は「覚えよ」と仰せになった。多くの心配や当惑のただ中で、人は律法の完全な要求に応じるのを避けたり、またその戒めの聖なる重要性を忘れてたりする傾向があることを主はご存じであった。それゆえ「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と仰せになったのである。

一週間を通してわたしたちは心に安息日を覚え、戒めに従って安息日を守るために準備をすべきである。……

安息日がこのように覚えられていれば、世俗のことが霊的なことを侵すようなことはない。仕事をなすべき六日間に属する義務が、安息日のために残されるようなことはない。一週間を通じて自分のエネルギーをあまりに世俗的な労働に使い果たし、主が休み、気分を清新にされたその日に疲れすぎて、主の礼拝に参加することができなくなるようなことはない。……

金曜日には安息日の備えを完了しなさい。衣服をすべて準備し、食事のしたくもすべてなし終えなさい。安息日は、衣服の修繕や、料理、娯楽、あるいはその他の世的な仕事のために与えられたのではない。日没の前にすべての世俗的な仕事はわきへ片付け、すべての世的な読み物は目に見えない所におきなさい。両親がたよ、あなたがたのなすべきことと、その目的を子供たちに説明しなさい。そして子供たちにも戒めに従って安息日を守るための準備を共にさせなさい。(教会への証 6 巻 353～356)

備えの日に注意すべきもう一つの仕事がある。この日に家庭内でも教会内でも兄弟間の不和はすべて取り除かれるべきである。いかなる種類の恨みも憤りも敵意も魂から追い出しなさい。謙遜な心で「互に罪を告白し合い、……お互いのために祈りなさい。」

太陽が沈む前に家族そろって神のみ言葉を読み、賛美し、祈るために集いなさい。(教会への証 6 巻 356)

わたしたちは熱心に、安息日の始めと終わりの時間を守るべきである。一瞬一瞬が神に捧げられた聖なる時間であることを覚えなさい。(教会への証 6 巻 356)

## 礼拝のために聖別される

「人々がわたしにむかって『われらは主の家に行こう』と言ったとき、わたしは喜んだ。」(詩篇 122:1)

神はわたしたちが仕事をするために六日間をそっくりわたしたちに下さり、一日だけをご自分のものとして取っておかれた。この日はわたしたちにとって祝福の日、わたしたちが世俗のことをすべてわきにやって、思いを神と天のことに集中させるべき日である。(家庭の教育 576)

全天が安息日を守っているが、それは、ものうい、何もしないような方法によってではない。この日に魂の全エネルギーは目覚めるべきである。なぜならわたしたちはこの日に神と、またわたしたちの救い主キリストにお会いするのではないだろうか。わたしたちは信仰によって神をながめることができる。神はすべての魂を祝福し、元気づけたいと切望しておられる。(教会への証 6 巻 362)

安息日の朝、家族は早く起きるべきである。もし彼らが朝遅く起きると、朝食や安息日学校のために用意する際、混乱と喧騒が生じるからである。あわてて、押し合いへし合いやいらだち起こる。こうして清くない感情が家庭に入り込む。このように汚された安息日はうっとうしいものとなり、安息日の来るのを愛するよりはむしろ恐れるようになる。(教会への証 6 巻 357)

安息日は神の時間である。神は七日目を聖別し、清められた。神は礼拝の日として守るように、この日を人のために取り分けてくださった。(原稿 34, 1897 年)

わたしたちは主の聖なる、聖別された日への真の礼拝の精神、献身の精神を心に抱き、養い育てる必要がある。わたしたちはイエス・キリストから慰めと希望、光と平安をいただくと信じて、共に集うべきである。(原稿 34a1894 年)

全天は安息日に、第四条の戒めの要求を認め、安息日を遵守している者たちを注視し、見守っていることがわたしに示された。天使たちはこの聖なる制度への彼らの関心と、高い尊敬に注目していた。厳密に敬虔な心構えをもって心のうちに主なる神を聖別する者、また力の限りを尽くして安息日を守ることにより、聖なる時間を活用し、安息日を喜びの日と唱えることによって神に栄光を帰す者、このような人々を天使は光と健康をもって特別に祝福し、彼らに特別な力が与えられた。(教会への証 2 巻 704, 705)

## 週のうちに最も幸福な日

「もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず、むなしい言葉を語らないならば、その時あなたは主によって喜びを得、わたしは、あなたに地の高い所を乗り通らせ、あなたの先祖ヤコブの嗣業をもって、あなたを養う」。これは主の口から語られたものである。』（イザヤ 58:13,14)

神の愛によって、労働の必要は制限されている。安息日の上に神は慈愛のみ手を置かれている。神は、ご自身の日に、家族の者が神と交わり、自然と交わり、またお互いに交わる機会を保存されている。(教育 297)

安息日と家庭は同じようにエデンにおいて定められ、神の目的の中にあって切っても切れない密接なつながりを持っている。この日には他の日より特にエデンの生活を送ることができる。家族の者たちが、……働きに勉強に礼拝にレクリエーションに、ともに交わることが神のご計画であった。(教育 297)

神の聖なる休み日は、人のためにつくられたもので、あわれみの行為は、安息日の意図に完全に一致している。(各時代の希望上巻 252)

苦んでいる人を救済し、悲しんでいる人を慰めることは、神の聖なる日に榮譽を帰す愛の働きである。(あがない 46)

安息日は創造力の記念であるから、他のどんな日より、神のみわざを通して神を知る日である。(教育 297)

この日のうち数時間、すべての者は戸外へ出る機会を持つべきである。子供たちは遊ぶためではなく、両親と連れ立って、戸外で数時間過ごすこと以上に、いかにして神に対する正しい知識を得ることができるであろうか。子供たちの若々しい心が美しい自然の光景の中で神と交わるようにしなさい。……神が人間の幸福のために創造してくださった美しいものを彼らが見るとき、子供たちは神を優しい、愛に満ちた御父とみなすようになる。……神のご品性が愛や慈悲心、美や魅力を帯びるとき、子供たちは神に引きつけられて愛するようになる。(教会への証 2 巻 583,584)

安息日、ああ、それを週全体の中でいちばん楽しい、いちばん祝福された日としなさい。(家庭の教育 580)

## 永遠に守られる

『『新月ごとに、安息日ごとに、すべての人はわが前に来て礼拝する』と主は言われる。』(イザヤ 66:23)

地球が創造主の御手から生じたとき、なんと美しかったことか! 神はそのすべてを見通される目ですら、一点のしみも汚れも見られない世界を宇宙の前にお示しになった。創造の各部分はそれに割り当てられた役割を占め、それが創造された目的に応えた。平和と聖なる喜びが地上を満たした。混乱も対立もなかった。人や獣を苦しめる病気はなく、植物界には腐敗や汚れはなかった。神はキリストによって実現された御手のわざをごらんになり、「はなはだ良」と宣言された。(レビュー・アノド・ハラルド 1904年7月21日)

安息日は創造の時に聖とされた。それは人のために定められたのだから、その起源は「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」時にあった(ヨブ記 38:7)。……

安息日はイスラエルのためだけでなく、世界のためであった。それはエデンで人に知らされ、十戒の中の他の戒めと同じに、不滅の義務である。この第四条が一部となっている律法について、キリストは、「天地が減び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはな」と宣言しておられる(マタイ 5:18)。天と地がつづくかぎり、安息日は、創造主の力のしるしとしてつづくのである。そしてエデンがふたたびこの地上に栄えるときに、神の聖なる休日は、天下のすべての者によってあがめられるのである。安息日ごとに、輝く新天地の住民は「わが前に来て礼拝する」と主は言われる。(各時代の希望上巻 360～363)

わたしたちは完全な愛という特質を養うために神の家に集まるべきであると神は教えておられる。これはキリストがご自分を愛するすべての者のために用意をしに行かれた住居に対して地上の住民をふさわしい者とする。この場所で彼らは安息日ごとに、新月ごとに聖所に集まって、賛美の気高い調べに声を合わせ、御座に座っておられる神と小羊とに永遠にわたって、賛美と感謝をささげるのである。(教会への証 6巻 368)

## 研究 9

## 最後の出来事



## 印する働きと 144,000 人

—The sealing work and 144,000—

「この後、わたしは四人の御使が地の四すみに立っているのを見た。彼らは地の四方の風をひき止めて、地にも海にもすべての木にも、吹きつけないようにしていた。またもうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った。『わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない』」(黙示録 7:1～3)。

上記の聖句を通してわたしたちは実に多くのことを学ぶことができます。特に、神の印について理解しなければなりません。この黙示録 7 章の天使の働きを各個人のものとして体得できるなら、それは言い表せない祝福となるでしょう。

「主は、時に応じた定めのご食事である現代の印する働きのご真理が欠乏しているために、尊い魂が飢えて死にかかっているのを、わたしに示された。そして、使命者たちは急いで出て行ってかの群れに現代のご真理の糧を与えなくてはならないことを主はわたしに示された。わたしは一人の御使がこう言うのを聞いた。『使命者たちよ、急ぎなさい。使命を負っている者は急ぎなさい。一人一人の魂の運命が生か死かのいずれかに決定されようとしているからである』」(ビュー・アソド・ハルト 1849 年 9 月 1 日)

「わたしたちの行動は、わたしたちが生ける神の印を受けるか、あるいは滅ぼす武器によって切り倒されるかを決定する」(教会への証 5 巻 212)。

「生ける神の印を持っている人々だけが、怒りのあらしから守る避け所を得るであろう」(ビュー・アソド・ハルト 1849 年 9 月 1 日)。

では、印とは何であり、どのような者に与えられ、どのようにしたら各個人が印する祝福にあずかることができるのかといった様々な問題を聖書と預言の霊を通して調べ、またはっきり理解して神のみこころがどこにあるかを謙遜に研究し

てみましょう。

## 1. 印とは何か？

「すなわち各州に送るものにはその文字を用い、諸民に送るものにはその言葉を用い、おのおのアハシュエロス王の名をもってそれを書き、王の指輪をもってそれに印を押した」(エステル記 3:12)。

「アハブの名で手紙を書き、彼の印をおして」(列王紀上 2:18)。

「王の名をもって書き、王の指輪をもって印を押した書はだれも取り消すことができない」(エステル記 8:8)。

「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした」(エゼキエル 20:12)。

「品性の試金石であり、生ける神の印である神の律法」(教会への証 2 巻 468)。

「神のしるし、あるいは印は主の創造の記念日である第七日安息日の遵守にあらわされている」(教会への証 8 巻 117)。

「十戒の中で第四条の戒めだけが天と地の創造主である立法者の印を保有している」(教会への証 6 巻 350)。

印はその所有者の名と力と位とを示しています。十戒の第四条を見てみましょう。

「七日目はあなたの神、主(名)の安息であるから、…主は六日のうちに、天と地と海(支配権の範囲)と、その中のすべてのものを造って(創造主としての力と位)…」(出エジプト 20:8～11)。

## 2. 印する働きの時期

「もうひとりの御使が、生ける神の印を持って」来たのは(黙示録 7:2)、「天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた」時である(黙示録 11:19)。

「この門は、1844年に、イエスの聖所における奉仕が終わったときに開かれた。そのときイエスは立ち上がり、聖所の門を閉じ、…今彼は箱のそばに立っておられる。…そしてイエスが、箱のある至聖所の門を開いて、戒めが神の民に対して輝き出ているので、彼らは安息日の問題によって試みられていることを、わたしは見た」(初代文集 105, 106)。

「わたしは安息日についての現在の試みが、イエスが聖所における奉仕を終わ

って第二の幕の中に入って行かれるまでは、起こりえなかったことを見た。従って、1844年7月に夜中の叫びが終わり、至聖所への門が開かれる前に眠りについたキリスト者たちは、真の安息日を守っていなかったが、今希望の中に休んでいる。なぜなら、かの門が開かれて以来われわれが今持っている安息日の光やテストは、彼らのものではなかったからである。」(レビュー・アンド・ヘラルド 1849年8月1日)。

「印する時は、非常に短くやがて過ぎ去ってしまう。四人の天使が四方の風を引き止めている今こそ、われわれの召しと選びとを確かなものにする時である」(初代文集 130)。

「今や、サタンはこの印する働きのとときに当たり、あらゆる手段を用いて神の民の心を現代の真理(すなわち印する真理)から引き離し、彼らを惑わせようとしている。…サタンはちょうどこの印する働きのとときにおいて、このような方法で、神の民の心をそらし、欺き、神から引き離そうとしているのをわたしは見た」(初代文集 107, 108)。

「イエスが聖所を去られると、聖であって義なる者は、聖で義なるままである。なぜなら、その時に彼らの罪はすべて消し去られて、生ける神の印を押されているからである。…それゆえに、来るべき怒りのあらしから魂を救うためになすべきことは、イエスが天の至聖所を去られる前にしなければならない。」(初代文集 115)。

「わたしたちは、その時(悩みの時)に入る直前にみな生ける神の印を受けた。その時、わたしは四人の天使が四方の風を引き止めるのをやめるのを見た」(SDAパイブル・コメント [E.G. ホットコメント] [E.G. ホットコメント] 7巻 968)。

### 3. 第三天使の使命と印する働きとの関係

「次に、わたしは、第三天使を見た。わたしと一緒にいた天使は言った。『彼の任務は、恐るべき任務である。彼は、麦を天の倉に入れるために、麦を毒麦からよりわけて印をおし、束ねる。われわれは、こうしたことに全身全霊をかたむけ、すべての注意を向けなければならない』(初代文集 221)。

「すると、わたしは、小さい群れが、狭い道を旅しているのを見た。すべての者は、真理によって束ねられ、一団となって固く結ばれているように思われた。天使は、『第三天使が、彼らを天の倉に入れるために束ねて印しているのである』と言った」(初代文集 177)。

「第三天使の使命は第四条の安息日の提示を要求し、この真理は全世界に伝

えられねばならない」(セレクトド・メッセージ 1巻 383)。

#### 4. だれに印がおされるか

- a. 「彼に言われた、『町の中、エルサレムの中をめぐり、その中で行われているすべての憎むべきことに対して嘆き悲しむ人々の額にしるしをつけよ。』」(エゼキエル 9:4)。

「教会の危険と沈下が最大の時に光の中に立っている小さい群れは、その地においてなされている憎むべきことに対し嘆き悲しんでいるであろう。…まさに大きな光を持っている人々の家庭において宗教がいやしめられているのを見て、彼らは神のみ前に悲しむのである。彼らが嘆きかつその魂を悩ますのは、教会内に誇り、貧欲、利己主義とほとんどあらゆる種類の欺瞞があるからである」(教会への証 5巻 209)。

「彼ら自身の霊的墮落に悲しみを感じないで他の人々の罪に対しても嘆かない人々は、神の印を受けないままに取り残されるであろう」(教会への証 5巻 211)。

- b. 「今こそ、準備する時である。神の印は、純潔でない男女の額には決して押されない。それは野心的で世を愛する男女の額には決して押されない。また偽りの舌を持ち、欺瞞的な心を持つ男女の額には決して押されないのである。この印を受ける者はみな、神のみ前にしみのない者で、天国のための候補者でなければならない」(教会への証 5巻 216)。

- c. 「生ける神の印は品性においてキリストのかたちにかたどっている者たちだけにおされるのである」(SDAパイブル・コメンタリ[E.G. ほか] 7巻 970)。

- d. 「わたしたちは、キリストの高さに達した男女となるために全力をつくしているであろうか。わたしたちはキリストの完全な品性という、わたしたちの前に掲げられた目標に向かってたえず押し進みつつ、このかたの満ちみちた徳の高さを追い求めているだろうか。主の民がこの目標に到達したときに、額に印を受けるのである。彼らは聖霊に満たされ、キリストにあつて全き者となり、記録の天使は『ことはすでに成った』と宣言する」(SDAパイブル・コメンタリ[E.G. ほか] 6巻 1118)。

「品性に一つでもしみや汚れがある間は、われわれのうちだれ一人も神の印を受けることはない。品性の欠点を改め、心の宮をすべての汚れから清めることは、われわれにかかっている。そうすれば、前の雨がペンテコス

テの日に弟子たちに下ったように、後の雨がわれわれの上を下るのである」(教会への証 5 巻 214)。

- e. 「自分を信用せず、神のみ前に自らを低くし、真理に従うことによって自分の魂を清める者、すなわちこれらの者は、天の型を受けている者であり、自分の額に神の印を押されるために準備している者である」(教会への証 5 巻 216)。

「もし主が自分に何を求めておられるかを知りたいのであれば、だれでもみな神の前にひざまずいて、子供のように謙遜ですなおな心をもって自分自身で、今聖書を研究しなければならない」(教会への証 5 巻 214)。

「あなたがたはキリストの学校で学ばなければならない。さもなければ、より高い学校に入り、生ける神の印を受け、門を通して神の都に入り、栄光と誉れと不死の冠をいただく資格を得ることは決してできないのである」(教会への証 5 巻 502)。

- f. 「額に神の印を受けることを望む者は、第四条の安息日を守らなければならない」(SDA バイブル・コメント [E. G. ホワイト] 7 巻 981)。

「安息日に商売の話をしたり、商売の計画を立てたりする者は、神から実際に商売の取り引きに従事したのと同じに見なされる。安息日を清く守るためには、世俗的な事柄を心に思いめぐらすことさえしてはならない」(人類のあけぼの上巻 359)。

「六日目に安息日の準備を怠る者、安息日に料理する者は、第四条の戒めを犯し、神の律法を犯す者である。戒めにしたがって安息日を守ろうと熱望する者は、安息日にどんな料理もしないのである」(霊的賜物 3 巻 253, 254)。

「あなたは神の律法を守ることを都合にあわせ、自分の仕事や好みの必要に応じて従ったり従わなかったりしている。これは安息日を聖別された制度として尊ぶことではない。このような無頓着な方法をとることによって、神の御霊を悲しませ、あなたの贖い主を侮辱しているのである。主は、安息日の律法を部分的に守ることをお認めにならない。そして、これはあなたが安息日を守る者だと公言しないより、もっと悪い感化を罪人の心に及ぼすのである」(教会への証 4 巻 248)。

「安息日を守ると公言する者がみな印を受けるのではない。真理を他の人々に教えている者たちの中にさえ、その額に神の印を受けない者が多い。彼らは真理の光を与えられ、主のみ心を知り、自分たちの信仰のすべての点を理解したが、それにふさわしい行いがなかったのである」(教会への証 5 巻 213, 214)。

「世と肉と悪魔とに勝利する者は、生ける神の印を受ける恵まれた者となる」(牧師への証 445)。

「インマヌエルの君の血染めの旗の下に立つ者はだれでも、フリーメーソンや他のいかなる秘密結社にも属することはできない。真理の光がその人の道を照らした後もなお、そのような関係を断たない者に、生ける神の印が押されることは決してないのである。キリストが分かたれることはないし、クリスチャンが神と富とに兼ね仕えることはできない。主はこう仰せになる。『彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ…そして、汚れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはあなたがたを受け入れよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる』(コリント第二 6:17, 18)」(セクレット・メッセージ 2 巻 140)。

では、次に印する働きと関係の深い 144,000 人について研究したいと思います。ある人々は、144,000 人について研究する必要はないと言います。しかし、証の書には次のように書かれています。

「神の民が、自分で推測しないとイケないようなことや、み言葉の中に教えられていないことを人々に提示するのは、神のご計画ではない。たとえば、だれが 144,000 人を構成するのだろうかというような、霊的な助けにならない問題をめぐって論争に入るのは神のみ旨ではない。このことは間もなく、神の選民にははっきりとわかるであろう」(セクレット・メッセージ 1 巻 174)。

ですから、わたしたちはこの印する働きという主題、すなわち 144,000 人について沈黙を守るのではなく、論争になるような推測、すなわち「だれが 144,000 人を構成するのだろうか？」というような論争には巻き込まれないように注意しつつ、この主題に対して聖書と預言の霊がはっきり教えていることを、関心をもって研究しなければなりません。

## 5. 144,000 人の標準

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(マタイ 5:48)。

「真理に従うことによって真に自分の魂を清める者は、自分自身に対して最も謙遜な見解を持つであろう」(教会への証 5 巻 471)。

「サタンは、彼らがその罪によって神の保護を失ったのだと声明し、彼らを罪人として滅ぼす権利があることを主張しながら、彼らに対する告発をもって神の

前に迫る。サタンは自分自身と同様、彼らが神の恩寵から除外されることを主張する。彼は言う、『いったい彼らが、わたしとわたしに従った天使たちの天での場所を占めるべき民なのか。神の戒めに服従すると公言しながら彼らはその命令を守ったであろうか。彼らは神よりもおのれを愛する者ではなかったか。彼らは神への奉仕以上に自分の利害を大切にしてきたのではなかったか。彼らは世のものを愛してきたのではなかったか。…神はわたしとわたしの使いたちをそのみ前から遠ざけながら、同じ罪を犯した者たちに報いたもうのですか。主よ、あなたは公正をもっては、このようなことはおできになりません。あなたの王座は義と公正をもって立つことはないでしょう。』…しかし、キリストに従う者たちは罪を犯したものの、悪の支配に身を任せてきたわけではなかった。…イエスは火の中で練られた金のようにして彼らを取り出されるであろう。キリストのみかたが完全に反映されるためには、彼らの地上に属する性質は、ことごとく取り除かれねばならない。不信は克服され、信仰と希望と忍耐とが発達させられねばならない」(教会への証 5 巻 473,474)。

## 6. 144,000 人の特徴 (黙示録 14:4, 5)

- a. 彼らは、女にふれたことのない者であり、純潔な者。
- b. 小羊の行く所へは、どこへでもついて行く者。
- c. 神と小羊とにさきげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者。
- d. 口には偽りがなく、傷のない者。

## 7. 彼らの数

「わたしは印をおされた者の数を聞いたが、イスラエルの子らのすべての部族のうち、印をおされた者は 144,000 人であった」(黙示録 7:4)。

「なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた」(黙示録 14:1)。

「わたしは彼女が印をおされたこと、そして神の聲がするとき地上に出てきて立ち上がり、144,000 の人々とともにいるようになることを見た」(レクテッド・メッセージ 2 巻 264)。

「第三天使の使命を受けて死んだ人たちは 144,000 人の一部分であり、この人たち以外に 144,000 人があるのではなく、彼らとその数を満たすのである。彼らはキリストの再臨の直前に朽ちる命をもってよみがえらされて、キリストの再

臨のときに朽ちない命に変えられるのである」(レ・ユ・アノド・ヘルト 1880年9月23日ゾームス・初付)。

「墓が開かれる。『地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう』(タニエル 12:2)。第三天使の使命を信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現われ、神がご自分の律法を守った者たちと結ばれる平和の契約を聞くのである」(各時代の大争闘下巻 415)。

「地上には90歳をすぎた人々が生きている。当然のことながら、老齢のために彼らには弱さが見られる。しかし、彼らは神を信じ、神は彼らを愛しておられる。神の印は彼らの上におかれており、彼らは主が『主にあつて死ぬ死人はさいわいである』と言われた人々の中に数えられるのである」(SDA パイブル・コメント[E.G.ホワットコメント] 7巻 982)。

「よみがえった安息日遵守者たちが144,000人の中に数えられるということに対してなお疑いが残るのなら、1909年にホワイト姉妹が語った次の言葉を考えてみてください。1909年の世界総会の時にアーヴィン長老はホワイト姉妹を訪ねた際、速記者を一人同行させた。彼は彼女に幾つか尋ねたいことがあったのであるが、質問の言葉を正確に残したかったし、回答についても正確な記録が欲しいと考えたのである。幾つかの質問事項の中に、このようなやりとりがあった。『この使命の下に亡くなった人も、144,000人に入るのですか?』ホワイト姉妹は答えて言った。「ええ、そうですとも。信仰をもって亡くなった方々は144,000人の中に入ります。この事についてははっきり申し上げます。』以上の事は、アーヴィン兄弟が速記者の記録から、わたしに写してもよいと言った質問と答えそのままのものです」(ジョン・ノートン・ラフボロウによる印する働きのメッセージについての質問 17)。

「数にして144,000の生きている聖徒たちは、その声を知って理解したが、悪人たちは、それを雷鳴と地震だと思った」(初代文集 64 下線邦文抜け)。

「144,000の人々は、みな印せられ、完全に一致していた」(初代文集 64)。

## 8. 彼らが受ける報い

※黙示録 14:1～3; 15:2～4

「やがてわれわれ(144,000人)は、多くの水の音のような神の声を聞いた。その声が、イエスの再臨の日と時とをわれわれに知らせた」(初代文集 63, 64)。

「われわれは、一緒に雲の中に入り、七日間のぼって行って、ガラスの海に着

いた。その時、イエスは、冠を持って来られて、ご自分の右の手で、それをわれわれの頭にのせてくださった。彼は、われわれに黄金の立琴と勝利のしゅろの枝をお与えになった。144,000の人々は、このガラスの海の上に、真四角に並んだ(初代文集 66)。

「サタンが告発をしていたときに、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の印を押していた。この人々は、その額に父なる神の名を記されて、小羊とともにシオンの山に立つのである。彼らはみ座の前で新しい歌を歌うが、それは地上から贖われた 144,000 人のほかは、だれも学ぶことができない」(国と指導者下巻 196)。

「われわれが聖なる神殿に入ろうとすると、イエスは、麗しい声をあげて『144,000 の人々だけが、ここに入ることができる』と言われ、われわれは、『ハレルヤ!』と叫んだ」(初代文集 70)。

「わたしはそこで、144,000 の人々の名が黄金の文字で刻まれた石の板を見た」(初代文集 70)。

わたしたちは今、第三天使が、麦を毒麦からよりわけて印をおし、束ねて、麦を天の倉に入れる、すなわち 144,000 人を数えている、ちょうどその時代に生存しています。すでに 1844 年から始まったこの印する働きは間もなく終わります。わたしたちの運命は、この天来の使命を少しも違えずに、生活の中にそのまま受け入れて実践するかどうかにかかっています。わたしたちの品性を、今、吟味してみましょう。家庭と教会、また皆様の所属している団体の状態はどうでしょうか。神がご自分のものとして印をおされるのにふさわしい状態であるかどうかを徹底的に吟味しなくてはなりません。これが大贖罪の日の体験です。そして、「144,000 人の中に入るために、神がわたしたちに賜ったすべての力を尽くして努力しようではないか」(パイブル・コメント [E. G. 初代コメント] 7 巻 970)。

わたしたちにあふれるばかりにお与えになった主の恵みによって、キリストの足跡に従い、天で 144,000 人のほかは、学ぶことができない歌にあずかる聖徒となるように願っております。

(52 ページの続き)

も長いあいだ、人々がご自分の子らをきずつけることをお許(ゆる)しにすることはありません。このお方は間に入って下さいます。そして、「人にはできない事も、神にはできる」(ルカ 18:27)。

多くの人々は今日、「馬」一大きくてすてきな車(くるま)、もしくは高いおもちゃーを、強いとかえらいとか自慢(じまん)に感じるために注目しています。聖書の預言(よげん)は、じつは今日の近代の車が交通でながれる光景(こうけい)をあらかじめのべています。「戦車はその備えの日に、火のように輝き、軍馬はおどる。戦車はちまたに狂い走り、大路に飛びかける。彼らはたいまつのように輝き、いなずまのように飛びかける」(ナホム 2:3,4)。

むかしとちょうど同じように、神様はわたしたちに、しあわせのための自分の希望(きぼう)を、ご自分にはなく、今日のいろいろな「近代的な馬」におくことを警告(けいこく)しておられます。「助(たす)けを得(え)るためにエジプトに下り、馬にたよる者はわざわざいだ。彼らは戦車が多いので、これに信頼(しんらい)し、騎兵(きへい)がはなはだ強(つよ)いので、これに信頼する。しかしイスラエルの聖者(せいじゃ)を仰(あお)がず、また主にはかかるとをしない」(イザヤ 31:1)。

けっきょく、わたしたちをほんとうに救(すく)い、まもることがおできになるのは、主だけです。「馬は勝利(しょうり)に頼(たの)みとならない。その大いなる力も人を助けることはできない。見よ、主の目は主を恐(おそ)れる者の上にあり、そのいつくしみを望(のぞ)む者の上にある。これは主が彼らの魂(たましい)を死(し)から救い、ききんの時にも生きながらえさせるためである」(詩篇 33:17～19)。

ですから、みなさんが大きくて強いものの力にくらみそうに誘惑(ゆうわく)されたら、ただ自分の聖書(せいしょ)のおはなしだけを覚えてまいりましょう。わかいダビデは神様に信頼することによって、おおきな巨人(きょじん)をたおしました。「ある者は戦車を誇り、ある者は馬を誇る。しかしわれらは、われらの神、主のみ名を誇る。彼らはかがみ、また倒れる。しかしわれらは起きて、まっすぐに立つ。主よ、王に勝利をおさすげください。われらが呼ばわる時、われらにお答えください」(詩篇 20:7～9)。

## 輪切り大根の豆腐詰め

### 材料

大根	2～3センチの輪切り	5切れ
豆腐	半丁	
人参	1/4	
さやいんげん	2～3枚	
えのき	少々	
ブナシメジ	少々	
ぎんなん	5つぶ	
ゆずの皮	少々	

### (調味料)

しょうが汁	小さじ1
塩	小さじ1/2
昆布だし(粉末)	少々
片栗粉	大さじ1

### (あんかけ)

しょうゆ	大さじ1
塩	少々
砂糖	小さじ1
だし汁	100cc
片栗粉	大さじ1

### 作り方

1. 大根を輪切りにした物を塩少々入れた鍋で透明になるまで固めにゆでる。
2. 透明になったら鍋から取り出し中を浅めにくりぬく。
3. 豆腐に野菜と調味料を混ぜあわせる。
4. くりぬいた大根の輪切りに3. とぎんなん1つぶを入れ色合いよく詰め、上に千切りにしたゆずを少々のせ蒸し器で10分蒸す。
5. さめたら取り出し煮詰めたあんかけをかける。

冬の季節のごちそうです。

## 教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



## 聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係  
是非お申し込み下さい。



## 書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。





## 馬力(ばりき) 対 天の力

ある者は戦車(せんしゃ)を誇(ほこ)り、ある者は馬(うま)を誇る。しかしわれらは、われらの神、主のみ名を誇る。(詩篇 20:7)

馬は神様の創造(そうぞう)された堂々(どうどう)とした動物です。各時代の人々は、馬のすばらしいつくしさと力を感じ心(かんしん)せずにはいられませんでした。しかも、これらのりっぱな被造物(ひぞうぶつ)が人間のために働くことをよろこぶということを知るのはなんとすてきなことでしょう。馬はよろこんで必要(ひつよう)な仕事(しごと)をします。

ですから、馬の力のゆえに、人間が作ったエンジンやモーターの力を、「馬力」の単位(たんい)ではかっても、ふしぎではありません。

馬は歴史(れきし)を通じて、戦争(せんそう)に使われてきました。モーセの時代に、エジプトー当時、世界最強(せかいさいきょう)の国家(こっか)ーはたくさんの馬と戦車をもって、自分たちの軍事力(ぐんじりょく)を誇っていました。しかし、わたしたちは、神の民(たみ)がにげるために紅海(こうかい)がどのようにして開かれたかを知っています。天の偉大(いだい)な神が、馬のひづめがどろにはまって不自由になり、先に進めなくなりました。また戦車の車輪(しゃりん)もはまってしまいました。そのとき紅海がもとの場所に流れかえて、エジプト軍はみんな一馬も戦車もおぼれてしまいました。「主はいくさびと、その名は主。彼はパロの戦車とその軍勢とを海に投げ込まれた、そのすぐれた指揮者(しきしゃ)たちは紅海に沈んだ」(出エジプト記 15:3, 4)

どうしてこうなったのでしょうか?人間的には不可能(ふかのう)です。しかし、やさしく、平和(へいわ)を愛(あい)される神様も、あまりに